

イッポンシメジ属のセコチウム型菌から検出されたアテリア目菌類

折原貴道* (神奈川県立生命の星・地球博物館)・山本航平 (栃木県立博物館)・金子義紀
(神奈川県立生命の星・地球博物館菌類ボランティア)・岩間杏美 (福岡市南区)

演者らはこれまでに本州、九州および佐渡島の林内において、広葉樹の落枝上に発生する小型 (直径 2.5–6 mm 程度) で類球形～偏球形の腹菌型～小柄を有するセコチウム型の子実体を散発的に確認していた。この菌は通常、子実体外皮がベージュ色～淡オリーブ褐色～淡褐色で、表面は白色の菌糸に被われ、子実体内部は不定形の腔室もしくは不規則に褶曲した不完全なひだからなるが、形態的変異が子実体間で著しい。内部の腔室及びひだには、数は少ないものの、しばしば広義のイッポンシメジ属 *Entoloma* s.l. に特有の多角形の担子孢子が確認されることから、本菌はイッポンシメジ属か、それに近縁なセコチウム型属菌であると推察されていた。

本菌の実体および生態を解明するため、演者らは、国内の複数地点から採集された本菌の子実体と、それに隣接して形成される白色の菌核様構造から DNA を抽出し、核 rDNA ITS 領域および大サブユニット領域の塩基配列を取得した。その結果、新潟県佐渡島、山梨県および静岡県から採集されたサンプルから、アテリア目 *Atheliales* の未知系統の担子菌が検出された。これらはいずれも同一種と考えられた。子実体の内部だけでなく、子実体表面の白色菌糸や周囲の菌核様構造からもこの *Atheliales* sp. の配列が得られたことから、子実体表面を覆っている白色菌糸がアテリア目菌類のものであると考えられた。子実体の傘表皮からの DNA 抽出物から得られた ITS 配列は 2 種の波形の重なりが見られた。一方、一部のサンプルにおいては、子実体内部の組織からイッポンシメジ属未知系統 *Entoloma* sp. および *Mycena* aff. *galopus* (ニセチシオタケ類似種) の塩基配列が得られた (ただし後者の子実体は不完全なハラタケ型)。

以上の結果から、子実体内部にイッポンシメジ型担子孢子を有するこのセコチウム型菌は、アテリア目菌類によって引き起こされた奇形であると考えられた。アテリア目はコウヤクタケ型子実体を形成する菌類からなり、腐生菌のほか、外生菌根菌や地衣生菌などが知られるが、きのこ類に寄生する菌は知られていない。現在までのところ、この *Atheliales* sp. が菌寄生菌であるとの確証は得られていないが、これまでの観察の結果からは、ある程度の宿主の選択性が認められることから、任意的に特定のハラタケ目菌類に寄生している可能性を含めて引き続き調査を進めている。